

「貧困の連鎖を解消する『現代の寺子屋』プロジェクト」の中間報告

Interim Report of the “Modern Terakoya” Project for Breaking the Chain of the Poverty

高 木 博 史*

Hiroshi TAKAGI

はじめに

沖縄県は温暖な気候やリゾート人気とは裏腹に、全国的に見ても県民所得の低さや高失業率、高離婚率、また、学力テスト全国最下位など生活の厳しさを示す指標は、軒並み高い数値を指し示している。

こうした状況のなかで、2011年度から2012年度の2年間をかけて沖縄県においてトヨタ財団の地域社会創造プログラムより助成を受けて「貧困の連鎖を解消する『現代の寺子屋』プロジェクト」が企画遂行されることとなった。本プロジェクトは、公益財団法人であるトヨタ財団の助成プログラムによって行われているものであり、沖縄県においてスクール・ソーシャルワーカー活動を展開していた繁澤多美氏をリーダーとして取り組み、筆者もプロジェクトアドバイザーとして関わってきた。

本稿は、その中間報告として今年度における取り組みの総括と来年度へ向けての課題の整理を行うことを目的としている。

1. 「貧困の連鎖を解消する『現代の寺子屋』プロジェクト」の概要

本プロジェクトは、大手自動車企業トヨタ自動車が「自動車をはじめましてから40年を機に、人

間のより一層の幸せを目指し、将来の福祉社会の発展に資することを期して」¹⁾ 設立した公益財団法人トヨタ財団より2年間で433万円の助成を受け、沖縄県のX地区を中心に「貧困の連鎖を解消する」目的で実施されているものである。

沖縄県は全国的に見ても失業率や離婚率が高く、親の生活状況が子どもの教育水準にも影響を与える世代間連鎖の様相を呈している。

一方で、「ゆいまー」といわれた沖縄特有の地域住民のインフォーマルな「相互扶助機能」も県庁所在地の那覇市を中心に都市化が進み、必ずしもその機能を果たし得なくなっている。

本とりくみは、こうした状況の中でスクールソーシャルワーク活動を展開してきた繁澤多美氏の経験に基づき提起された企画であり、「すべての親も子どもも自分の人生をよりよく生きぬく力を身につけること」²⁾ を目的とし、とくに就学援助率が全国平均を大きく上回るX地区を中心にとりくんでいるものである。そして、その対象として「言葉や発達に遅れのある児童、不登校児童、学校や職場に所属せずにいわゆるニートと呼ばれる未成年者、外国籍で日本語でのコミュニケーションが十分にとれない親、就労意欲はあるが基礎的な学力に自信がなく履歴書の記入等が困難な親、子育てに不安を抱える親などを対象」³⁾ としている。いずれも、放置すれば社会的に不利

*社会福祉学部助教

な状況に陥る危険があり、結果として生活困窮や貧困状況に至ってしまう危険が高い世帯（とその世帯構成員である子ども）である。こうした状況を少しずつでも解消していくために福祉関係者（ソーシャルワーカー）や教育関係者の協働から「貧困の世代間連鎖の解消実践モデルを提起」⁴⁾したものであり、江戸時代の「寺子屋」にヒントを得て、さらに、現代におけるNPO活動の広がりや地域ネットワークも含めたソーシャルサポートシステムの構築を目標として「現代の寺子屋」というネーミングとなった。

また、プロジェクトの中間報告にあたり、本稿では「子どもの母親」について、子どももからの目線で母親の状況をとらえていこうという意味で、あえて「お母さん」という表現を用いることとする。

2. とりくみの現状と成果

本プロジェクトの柱となっているのは、「ことばの教育」「食育」「訪問活動」「しゃべり場」「放課後学習」「学習塾」「遊び」などである。ここでは、具体的にどのような取り組みがなされてきたのかということについて報告を行う。

「ことばの教育」

このとりくみは元特別支援学級教諭によって行われている。地域の学校の特別支援学級に通う小学生を対象に50音表を使い、繰り返し教えることで、全く文字が読めなかった子どもたちに短い単語も読めるようになることを目標としている。

「ことば」が使えないことは現代社会において決定的に不利になる要素の一つであるといえる。しかし、一方で障害のある子どもたちに対し、必ずしも十分な教育訓練が行われてきたとはいえない実態も存在する。

本とりくみの参加者は数名であるが、一人ひとりのこどもに丁寧にそして徹底的に教育訓練を行うことで、自らの力で言葉を発し、理解できるようになることを目標としている。もちろん、個人差はあるが、この取り組みに参加した子どもたちは、自ら自分なりの「ことば」を習得していったのである。

「食育」

このとりくみは、生活協同組合の職員の協力を経て、お母さんたちに「食べ比べ」をしてもらい、子どもにとって「良い食事」とは何かについて考えてもらうという企画や、地域に居住する外国籍のお母さんに講師になってもらい、学校の調理室を使用し料理教室を開催するなどを行うとりくみである。

本取り組みの成果として、「食育」としてお母さんたちが集まる機会を得たり、料理教室を通じて地域住民の交流などが生まれ、参加した者からは、「また参加したい」といった感想も聞かれている。すでに触れたように都市化が進み「ゆいまー」機能が希薄となってきた今日の沖縄においてこうした機会が地域からの「孤立」を防ぐ一つのきっかけとなっているといえる。

「訪問活動」

「訪問活動」は、ソーシャルワーカーを中心に家庭訪問を行う取り組みである。訪問先は、基本的な生活習慣が身につけていない親や子どもの世帯が多く、時には家屋の清掃等も行うことがある。子どもの育ちをサポートするという意味では居住空間が劣悪な環境である場合はその改善を図っていく必要があるために重要な活動の一つともいえる。

一方で、せっかく家屋の清掃を行ってもすぐにまた元の状況に戻ってしまうこともあるが、家庭生活の課題を子どもや親を理解する機会でありその意義は大きい。

「しゃべり場」

「しゃべり場」とは、NHKで放送されていた番組にヒントを得た企画であり、就学前の子どもお母さんたちが集まり、子どもについての悩みを話したり、会話を楽しみながらおもちゃづくりを行っていくといったものである。

この企画には「お母さん編」だけではなく「中学生編」もあり、近況などを話し合っている。楽しそうに話している様子を見て、そこに小学生を参加したいという意思を示したりすることもあった。

不登校気味で学校にはなかなか行くことはでき

ない子どもたちも、ある意味で「フリースペース」的な機能を果たしているこの企画によって、自ら近況を話したりすることができるようになるなどの成果も見えている。また、大学生のボランティアなども参加し、企画が盛り上がるように工夫がなされている。

「放課後学習」

「放課後学習」は、本プロジェクトの中でも一番、参加者数が多い企画でもある。小学校に併設されている「ミーティングルーム」を開放してもらい実施していたものである。ピーク時には100名近くの参加者があり、若干減少があったとはいえ数十名の参加が続いている。参加費は保険料の一部として年間100円を支払う形にしている。なぜ100円なのか。実は、本企画前に実施されていた「放課後学習」では300円の徴収を行っていたそうであるが、この300円が家計の状況により「支払いがなされない」世帯の子どもに対し、「支払いができていない」世帯の子どもが見下すような発言があったともいわれており、そのような事態を防ぐために100円としているのである。一方で、そのような事態にセンシティブになるぐらいなら「無料」にしてはどうかという意見もあるだろうが、ここは「親」の微妙な心理によるものがあるのではないかと推測できる。なぜならば、特にこれまで子どもの教育に関心を寄せてこなかった親が、「無料」である意味で「お手軽過ぎる」企画にそれほど関心を寄せるとは考えにくい。わずかでも「参加費」を徴収することで、そうした微妙な心理に働き掛けることが目的でもある。一方で、その金額が300円となると家計の負担とを感じる親も出てくるが、子どもがお小遣いの範囲内で「放課後学習」に参加したいという意思を示し、自ら100円を親に要求した場合、親としても応じやすいということも考えられる。現在、この件についてはとくにクレーム等もなく参加者も比較的多数で安定していることからそのことがいえるであろう。

また、本企画にも学生ボランティアが参加し、勉強が遅れている子に対する指導やスタンプやシールなどを使い子どもの学習意欲を盛り上げる工夫などがなされている。ちなみに、学生ボランティアに対しては、本企画の趣旨について説明を

行うなどの研修を課している。

「学習塾」

(おきなわ『高校へ行こう!』塾)



また、本プロジェクト内で運営されている「学習塾」は、高校教員等がボランティアで休日等を利用して運営されるいわば「手作り」の塾であり、いわゆる本格的なものではないが、「おきなわ『高校へ行こう!』塾」と命名され行われてきたものである。写真はその様子である。

時には、いわゆる大人のボランティアによる「指導」ではなく、近所の子どもたちにおける「先輩」が「後輩」に「教師役」となっている行われることもあった。

参加者は数名と少なかったが、参加していた子どもたち全員が高校へ合格という成果を上げることができた。

「遊び」

「遊び」は、人生を楽しく幅のあるものとさせてくれる。ひきこもり傾向や学校でのコミュニケーションに不安がある子どもたちを「元気づける」ためには「遊び」という要素も重要である。

たとえば、「人生ゲーム」があげられる。内容的にはいわゆる「すごろく」であるが、人生の中で起こる比較的大きな出来事といえる「就職」「結婚」「転職」「マイホームの購入」といったもの、ときには「犯罪に巻き込まれる危険」といった要素が織り込まれ、それにとまって動く「お金」をどのように使うのかという要素も重要である。

また、「小旅行企画」や「クリスマスパーティー」といったイベントも本プロジェクトの魅力の一つである。「貧困の連鎖を解消する～」というイメージはどうしてもある種の「暗さ」を払しょくできない部分があるが、そのような意味では、「楽しみ」を随所に織り込んでいくことによって「貧困の連鎖」から生きる力を連鎖させる方向へ転換させることが大切である。

(南部へのドライブツアー)



こうした「遊び」のとりくみは、一見、貧困の連鎖の解消とは必ずしも関係があるようには見えないが、ひじょうに重要な問題提起がなされている。

低所得の家庭の多くは、日中、親が生活のために働きに出ざるを得ないために、自らが住んでいる地域以外の場所に行ったことがないという場合も少なくない。こうした状況の中で企画される「小旅行」は、子どもたちにとって「非日常」であり、単調な生活に刺激を与えることができ、その結果、一定の充実感や満足感を得ることができるのである。それが、生活に張りを与えることになり、それまでの価値観の転換や自主性の育成といったところにも少なからず影響を与えていくことができるといっても良いであろう。写真は、「おきなわ高校へ行こう塾!」に参加していた子どもの合格祝いを兼ねて南部のカフェに「小旅行」を企画した時の写真である。この時、子どもたちは充実感にあふれた笑顔をしていたという。

4. 本プロジェクトの課題

ささやかではあるが着実に成果を上げていると

いえる本プロジェクトだが、いくつかの課題も浮かび上がってきた。

一つは、ボランティアや地域組織化の難しさである。本プロジェクトの特徴として、貧困解消へつなげていくために様々なプログラムが準備されているが、こうしたプログラムが多いことは、それにかかわる者の興味・関心、あるいは価値観も多種多様であり、必ずしも「一つの方向性」に向かってということにはなっていない。しかし、プロジェクトを強力に遂行していくためにはボランティアや地域ネットワークの力は欠かせないものである。当事者を含め一定の温度差がある中で、それぞれの特徴を活かしつつ一方で、機能的なネットワークを構築していくことや、あるいは、専門職（ソーシャルワーカー）がどのような関わりを持っていくのかということが課題である。

二つ目は、「貧困の連鎖を解消する『現代の寺子屋』プロジェクト」という名前の持つイメージの問題もある。その趣旨や実践については一定の評価を得てきたものの、このプロジェクトを遂行している地域に「貧困地区」といった一種の「ラベリング」を行っているのではないかという批判である。直接的な批判ではないが、地域住民の温度差を生じさせていることもあるであろう。確かに、本プロジェクトの名称を全面的に押し出した企画であれば少なからずの抵抗感が生じることも考えられる。そうした意味では、今後、「誰でも気軽に参加できる企画」をめざし、一定の配慮を検討しなければならない。

三つ目に学校現場との温度差である。「放課後学習」や「ことばの教育」といったいわば地域住民や専門職によるボランティアな活動に対し、同じ地区内にあってもひじょうに協力的な学校現場と必ずしも協力的でない学校現場が存在することも明らかになった。これは、ある意味で「教育」の領域と「福祉」の領域の境目がどこであるのかということがひじょうに分かりづらいがゆえにある種の「縄張り争い」が行われた結果ともいえる。今後、両者の温度差を縮めていくためには、様々な情報が集中する「学校」が地域の拠点となる自覚と覚悟が必要になってくることを問題提起したといっても良いであろう。

四つ目は、継続性の問題である。本プロジェク

ト終了後、この実践の蓄積を地域でどのように生かしていくのかという課題にもつながるが、これにはNPO団体や学校現場、行政といった多種多様な団体・機関の連携が必要不可欠となってくる。しかしながら、現状では、必ずしもスムーズな連携ができていたとはいえず、今後は、それぞれとの協議の場や実践の蓄積の意義について合同の学習会を開催することなどについても検討課題となっている。

このように、すぐに解決に結びつくような妙案がない課題も少なくないが、こうした課題の改善をめざしつつ、助成金の有意義な使用方法を検討していくことが現在の至上命題となっている。

プロジェクト最終年度へ向けて

2012年度は、本プロジェクトの最終年度であり、この取り組みをさらに発展させていく必要がある。これまでのとりくみに加え「お母さん」たちの「自己肯定感」や「社会適応力」を高めるために有償ボランティアとして本プロジェクトの一端を担ってもらうことや子どもたち、あるいは、親子で宿泊訓練を行い、その間に基本的な生活習慣を身につけるためにプログラムにとりくんでもらう「親子トレーニング室（仮称）」の開設などを構想している。

また、プロジェクト当初よりNPO等との連携も模索してきたが、今後はさらなる連携も求められてくるであろう。この件に関しては、プロジェクトリーダーである繁澤多美氏が代表理事を務め、

筆者も共同代表を務める社会福祉士が中心となって貧困問題解決のために諸活動を行っている「特定非営利活動法人いっぽいっぽの会」の全面的な協力を得ることが了解されている。

このように次年度へ向けて様々な構想も模索しているが、本報告により、初年度の総括としたい。

また、最後に本プロジェクトの様子については随時、ブログ等によって発信を行ってきているが、こうした報告書の作成など多様なアウトプットによって地域社会に問題を提起し続けることを自らの使命と課題として位置づけていく必要があると考えている。

1) <http://www.toyotafound.or.jp/profile/charter.html>

2) 「貧困の連鎖を解消する現代の『寺子屋』プロジェクト」『トヨタ財団 2010年度地域社会プログラム応募用紙』

3) 同

4) 同

参考文献・資料

・貧困の連鎖を解消する現代の『寺子屋』プロジェクト」『トヨタ財団 2010年度地域社会プログラム応募用紙』
・公益財団法人トヨタ財団（地域社会プログラム）

<http://www.toyotafound.or.jp/project/community/index.html>（2012年4月現在）

・「貧困の連鎖を解消する『現代の寺子屋』プロジェクト」ブログ

<http://gendainoterakoya.blog.fc2.com>（2012年4月現在）